【表現学関連分野の研究動向】

言語学

髙坂　京子

言語学の2012年度の研究動向について書くようにとのことであったが、あまりに広範なので、ここでは表現研究に関連すると思われる意味論と語用論の分野を中心に、筆者の関心をひいた研究を取りあげたい。

意味論の分野では、近年、認知意味論の研究が注目されており、海外では大御所J. Taylorの「言語はいかに心の中で表示されるか」を論じた新著The Mental Corpus: How Language Is Represented in the Mind（OUP）が刊行されたが、国内でも研究の先端をいく山梨正明氏のこれまでの成果が、著書『認知意味論研究』（研究社）として出版された。後者は、イメージ操作、メタファー写像などの認知言語学の視点から、日常言語の概念体系に関わる言語現象が丁寧に考察されており、小説，詩，落語，ジョークなどからの豊富な具体例を用いた分析は、たいへん刺激的で学ぶところが多い。

また、これまで曖昧であった意味論と語用論の境界を明確にし、意味理論のあるべき姿を示そうとしたのが今井邦彦・西山祐司著『ことばの意味とはなんだろう―意味論と語用論の役割』（岩波書店）である。認知語用論として位置づけられる関連性理論をベースに、徹底したデータ分析を行いながら、語用論的意味は意味論的意味に制約されていることを論じ、ことばの意味に関わる現象に新たな洞察を加えた。

意味論の分野でもう一点、特筆すべきは、小田涼著『認知と指示―定冠詞の意味論』（京都大学学術出版会）である。日本人にとって難しいと言われる英語とフランス語の定冠詞を取りあげ、ことばが置かれる「場」に着目する方法で冠詞の用法の明確な説明を試みている。2012年度渋沢・クローデル賞（日仏間で、相手国の文化に関する優れた研究に贈られる賞）を受賞した力作である。小説や新聞、映画などからの用例が豊富で、冠詞にまつわるコラム記事も面白く、定表現を考えるうえで貴重な一冊である。

次に意味論・語用論の延長線上にある研究として、コーパス言語学の文献を紹介する。コーパス言語学は2012年度日本語用論学会のシンポジウムのテーマにも取りあげられ、海外ゲストを交えて活発に議論された。そのときの発表者でもある石川真一郎氏の『ベーシックコーパス言語学』（ひつじ書房）は、英語と日本語の両方を視野に入れながら、コーパス言語学の最新状況を概観する充実した内容の入門書で、コーパスを用いたさまざまな研究例も参考になる。

最後に、ガイ・ドイッチャー著・椋田直子訳『言語が違えば、世界も違って見えるわけ』（インターシフト）を挙げておく。一般書ではあるが、「サピア＝ウォーフの仮説」が真か否かを、近年の研究を追いながら論じた興味深い一冊で、原著はすでに海外で年間ベストブック（2010年エコノミスト誌他）などをいくつも受賞している。言語学や言語表現を扱った著作がこのように一般の注目を浴びるのは喜ばしいことである。

（立命館大学）